くらしに根付くガスの世界

特集“博物館の歩き方”＃1［GAS MUSEUM がす資料館］

博物館を身近な存在に

錦城の周辺には様々な博物館や資料館があるが、錦城生にあまり知られていないところも多い。そこで地元民ではない錦城生にも足を運んでもらうべく、博物館めぐりをスタートした。第一弾は、錦城から徒歩４分の GAS MUSEUM。ガスの歴史を学び、点灯実演などを鑑賞した。

（編集部共同取材）



赤レンガの建物にガス燈の緑が映える

明治から続く歴史を学ぶ

８月７日（金）、錦城から見て新青梅街道の向かい側に建物を構える「GAS MUSEUM（以下ガスミュージアム）」に伺った。

ここは東京ガスが運営しており、来年で創立60周年を迎える。資料館はガス灯館とくらし館に分かれており、ガス灯館では都市ガス事業の歴史を、くらし館ではくらしとガスの関わりを中心に紹介している。どちらも明治に建てられた東京ガスの施設を移設・復元したそうだ。約１万４００点の資料が収蔵されており、書籍だけで１万１０００点に上る。

くらしのガス器具をたどる

くらし館に入ると、「瓦斯器具立体型録」がお出迎え。これは日露戦争の起こった１９０４年（明治37年）に発行されたカタログ「瓦斯営業案内」と同時代の代表的なガス器具を展示したもので、当時はすべて輸入品のため非常に高価だったという。

さらに明治後期から大正、昭和にかけて登場したガス器具がずらっと並ぶ。時代と共に炊飯器やオーブン、給湯器などが登場し、人々の生活が少しずつ豊かになっていったのがわかる。



明治を生きた人の思い出と結びついた代物

今回案内をしてくださった学芸員の相良香子さんによると、くらし館に入ると、ガス灯館では都市ガス事業の歴史を、くらし館ではくらしとガスの関わりを中心に紹介している。どちらも明治に建てられた東京ガスの施設を移設・復元したそうだ。約１万４００点の資料が収蔵されており、書籍だけで１万１０００点に上る。

くらしのガス器具をたどる

くらし館に入ると、「瓦斯器具立体型録」がお出迎え。これは日露戦争の起こった１９０４年（明治37年）に発行されたカタログ「瓦斯営業案内」と同時代の代表的なガス器具を展示したもので、当時はすべて輸入品のため非常に高価だったという。

さらに明治後期から大正、昭和にかけて登場したガス器具がずらっと並ぶ。時代と共に炊飯器やオーブン、給湯器と、くらしと共にあったガス機器は見る人によって様々な楽しみ方があり、小さいころ実際に使っていた思い出を語ってくれることもあるそうだ。展示されているガスオーブンと同じ型で昔クッキーを焼いていたと聞かせてくれた女性もいたという。

くらし館の２階では、燃料が石炭から石油、天然ガスへと移り変わっていく様子が展示されていた。最初に目に留まったのは、大きな石炭の塊。１㎡の正方形で、人気ゲーム「マインクラフト」の石炭ブロックに似ているため、来館者からは「マイクラ」と呼ばれることもあるそうだ。

さらに進むと、伸びが大きく破断しにくくなっていて地震による損傷を回避できる、ポリエチレン（ＰＥ）のガス管も展示されていた。特別に触らせていただき、実際に持ち上げてみると見た目に反して思ったより軽く驚いた。



震災以降、ＰＥのガス管が広く普及した

また、震度５相当以上の地震を感知すると自動でガスを停止するメーター、マイクロコンピューター入りメーター（マイコンメーター）も紹介されていた。災害時の火事防止だけでなく、普段のガス消し忘れなどでも作動するそうで、復帰もボタンひとつでできるという。

世界のガス燈が集う

外のガスライトガーデンにはガス燈が18基並ぶ。湯島天神や浜離宮など日本を代表するガス燈に加え、ロンドンやパリなど世界各地のガス燈も展示されていた。日本は丸みを帯びた形が多いが、イギリスのウェストミンスターのガス燈は直線で形作られており、形の違いの観察も楽しみのひとつだ。ガス燈のなかに１基だけ、炎の形が魚の尻尾のように見える「魚尾灯」が隠れている。ぜひ探してみてほしい。



外のガス燈は常にガスで点灯されている

環境保護のカギ、ｅ-メタン

くらし館１階の隅に「都市ガスの未来の姿」の展示がある。都市ガスの燃料は天然ガスだが、有限でありCO_2も排出するため、対策が必要だ。そこで注目されるのが、排出されたCO_2を、使用・吸収して実質ゼロにする「カーボンニュートラル」。その一例として、天然ガスを燃やして発生したCO_2を水素と反応させ、天然ガスの主成分・メタンを作ることで、CO_2を実質ゼロにする取り組みが紹介されていた。このメタンは「ｅ-メタン」といい、実証実験も進んでいる。

東京ガスは現在カナダでｅ-メタン事業の開発プロジェクトを進めており、２０３０年までに年間３万トンのｅ-メタンを製造し、日本向けに輸出することを目指す。

ｅ-メタンは自宅のガス機器を変えずに利用でき、環境にやさしいくらしを日常に簡単に取り入れられる。

＊＊＊＊＊＊＊

電力が普及する世の中だが、ガスは私たちのくらしにまだまだ強く根付いている。今後はより環境にやさしい方法で支えてくれるだろう。

この度は取材させていただき本当にありがとうございました。

（翠、富、梅、鈴）



展示ボードでｅ-メタンのしくみを学べる

「六本木ヒルズの電気は都市ガスです」

突撃インタビュー～現地の声、お届けします～

このコーナーでは博物館・資料館ではたらく方々の生の声をお届けする。今回はガスミュージアム館長の石川登志樹さん、編集部を案内してくださった学芸員の相良香子さんにインタビューを行った。

石川館長は理工学部出身。東京ガスで研究室や法人営業を経て現職に就任。館長は都市ガスの大きな魅力として、個別発電ができることを挙げてくれた。なんと六本木ヒルズは環境に配慮し、都市ガスで発電と冷暖房を同時に行っているそうだ。15年前の東日本大震災でも停電しなかったという実績は、都市ガスの高い信頼性を証明している。

館長のお仕事で大変なことは、ホームページやインスタグラムの運営をはじめとする企画の運営も担当しているという相良さん。ガスミュージアムの史料を通して多くの人に歴史を楽しんでいただけるような企画を考えているという。例えば今年の９月27日（日）まで行われていた『お菓子四季折々』展は夏休みを挟む展示なので、どの年代にも楽しんでもらえるお菓子をテーマにしたそうだ。

最後に、石川館長が錦城生に向けて「お近くなのでぜひ遊びに来てください」とメッセージをくれた。



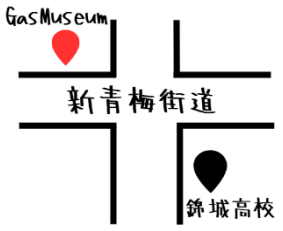
石川さん（左）、相良さん（右）

おすすめの一品



学芸員・相良さんのお気に入りの展示、**カニストーブ**。ガスで熱すると白い部分がゆでたカニのように赤くなる仕組みで、施設でも人気。昔の人も日常にユーモアを添えて楽しんでいたと思うと、なんだか親しみを感じて温かい気持ちになってくる。そのかわいさに編集部からも思わず歓声。

開館情報



開館時間：10:00～17:00
休館日：月曜日、年末年始
入館料：無料
アクセス：
錦城から徒歩４分
西武バス「ガスミュージアム入口」から徒歩１分
（錦城前も通るバス!）
赤レンガの建物と広々としたガスライトガーデンがあなたを待っている。

編集部のイチオシ！

このコーナーでは資料館を取材した編集部員おすすめの展示をご紹介する。今回は３つピックアップ。興味のあるものがあったら、ぜひその目で確かめてみてほしい。

「お菓子四季折々」展

９月 27 日まで開催されていた企画展。明治から現代までのお菓子に込められた人々の想いや伝統を、錦絵やガス器具、当時の書籍などの資料を通して紹介。あの人気ドーナツ店ともコラボしていた。発行が期間内に間に合わずお詫び致します。



花ガス



花の形をしたガス燈。昔のイルミネーションで使われており、火が付く瞬間が幻想的。夏休み期間は点灯イベント「あかりのうつりかわり」が実施されていたが、それ以外の期間でも１日に３回、11時、14 時、15 時に点灯実演を開催しているそうだ。

昭和の台所比較

昭和 10 年代と高度経済成長期の台所が比較できる展示。写真は後者のもの。この反対側にある前者の台所は昭和初めのくらしが色濃く反映されている。時を経てだんだん豊かになっていく人々の暮らしに思いをはせてみてほしい。



むらさき草

錦城に入学してから、友達と地元の話になると「私の地元何もないんだよね」と言われる。静岡県の中学校に通っていたためか、私にとって東京での生活は驚きの連続だ▼特に感動したのは、交通機関の便利さ。静岡にいた頃は、遊びに行くとすれば駅に行き、映画を観るくらい。買い物は車が必須だった。テレビやＳＮＳで見る話題の娯楽を楽しむハードルはとても高かった。移動の自由があり、学生でも自力で最新のトレンドや娯楽を体験できる環境は、東京の圧倒的な強みだと思う▼２０２５年国勢調査の速報値によると、２０２０年調査から人口が増えたのは東京、沖縄の２都県のみで、首都圏でも埼玉、千葉、神奈川の３県が減少した（日経新聞 Web 記事、２０２６年５月 29 日配信）。インフラがこれだけ揃っていれば、東京に人も企業も集中するのは、身をもって実感できる▼友達は「自慢できるのは多摩動物公園くらいしかないよ」「私の家の周りは畑しかない」という。しかし、国木田独歩の小説『武蔵野』にも、「大都会の生活の名残と田舎の生活の余波とがここで落ちあって、緩やかにうずを巻いているようにも思われる」なんて一節が出てくる。独歩は都会と田舎の間にある武蔵野の景色をみて、「人々の暮らし」や「自然の豊かさ」が混ざり合い、独特の雰囲気をつくっていると書いていた。錦城のある武蔵野台地は、昔から都会と田舎をつなげる場所であった。住宅街が続いて畑もあるが、電車に乗れば都心に行くことができるのだ▼ここ武蔵野の地は、とても恵まれている。静岡から来た身として、錦城生の皆に声を大にして伝えたい。「電車で都会に行けたら、何もない場所じゃないんだよ！」

（富）

錦城高校新聞

題字　井口　文章
再刊　５３６号
印刷・発行
錦城高等学校新聞委員会
編集室 2026

みんなでつくる
錦城高校新聞

一面：ガスの力で過去と未来をつなぐ
「GAS MUSEUM がす資料館」取材
二面：ミクロの世界から宇宙規模まで！
科学の体験場・多摩六都科学館取材

科学の魅力はどこまでも深く

特集“博物館の歩き方”#2［多摩六都科学館］

ミクロから宇宙の果てまで

「博物館の歩き方」第二弾は、錦城のある小平市を含む5市で運営する科学館「多摩六都科学館」。科学の奥深い世界を探検・体験し、その魅力に迫った。（編集部共同取材）



多摩六都科学館エントランス・ホール天井にある
惑星探査機「ボイジャー」の実物大の大型模型
2階ホワイエから間近で見ることができる

子どもの夢が詰まった場所

多摩六都科学館は多摩5市（小平市、東村山市、清瀬市、東久留米市、西東京市）が共同で運営する、体験型ミュージアム。錦城からは、武12系統「武蔵小金井駅行き」のバスに乗り、花小金井五丁目で降りて、そこから徒歩15分で行くことができる。２０２４年には開館30周年を迎えた。夏休みも終わりの8月28日、館内は子どもたちの楽しそうな声であふれていた。

かつてギネス記録に登録されていたプラネタリウムドーム「サイエンスエッグ」と、科学のテーマごとに分かれた5つの部屋で構成されている。



実際のギネス記録の公式認定証

月の世界を疑似体験！

最初の部屋は、物理や宇宙の不思議を体感できる『チャレンジの部屋』。実物を展示している「実物元素周期表」や、スペースシャトルの模型の中をアスレチックのように上れる展示などがある。地球と他の惑星の重力を比較できるブースで重りを持つと、太陽での1kgは他の惑星と比にならないほどずっしりと感じ、太陽の重力の大きさを感じた。

『からだの部屋』は、人間の身体のつくりやメカニズムを学べる。動物や恐竜の進化を学べる展示をはじめ、五感をフル活用するブースや反射神経を測るゲームなど、身体を使う展示が盛りだくさん。ちなみに後者のゲームの編集部最速は13.9秒／30回。ぜひ挑戦してみてほしい。

日常生活を支える技術を集めた『しくみの部屋』では、時計やピアノといった身近な機械の構造を観察できる。リニアモーターカーの模型の磁石を電磁気で操作してリニアモーターカーを動かしたり、「エレクトリックタウン」で実際に自転車をこいで発電し、模型の街を明るくしたりと、しくみを体系的に学べる。

空き時間に訪れたという20代の男性は、「塾の講師のアルバイトをしていますが、教科書に出てくる内容が視覚的に体験できると思いました」と興味深そうに話した。

ボタンひとつで竜巻発生

武蔵野の生き物や自然環境を紹介する『自然の部屋』。昆虫標本や動物のはく製など、錦城の周りで見かける生き物も観察できる。「しぜんラボ」では多摩川の水中を見渡せる「多摩川３６０。ツアー」などを開催していた。

自然の部屋ではこの日、展示をめぐるビンゴのイベントが行われていた。ビンゴに参加した小学四年生の女の子は「たくさん埋まった。楽しかった」と嬉しそうに話をしてくれた。

最後の『地球の部屋』は、貴重な化石や岩石の展示が見られる。さらに、ボタン一つで竜巻やオーロラを発生させたり、ハンドルを回して地震を起こしたり、南極のライブ映像を見たり、地球の営みをリアルに感じることができる。武蔵野台地の川パズルに挑戦できるコーナーでは子どもがお母さんと真剣にパズルに取り組んでいる姿が見られた。



地震のプレートの動きを
観察する男の子

ボランティアの支え

科学館ではボランティア会も来館者の体験をサポートしている。「からだラボ」でパズルや知恵の輪に挑戦する子どもたちを見守っていたボランティア会の岩佐さんは、「子どもたちにとって科学は難しいものだと思いますが、ここで体験したことを持ち帰って生かしてほしいです」と話してくれた。



子どもたちの成長を
やさしく見守る

「しくみラボ」で子どもたちと鏡の実験をしていたのは、大学生の辻岡さん。実は小学５年生のころから多摩六都科学館のジュニアボランティアとして活動しており、その縁で大学生になった今はアルバイトとして活動しているという。子どもに「ありがとう」と言われたり、楽しそうな笑顔を見たりすることがやりがいだそうだ。



小学５年生の頃から
科学館をサポート

辻岡さんは、多摩六都科学館のジュニアボランティア（現在は募集期間外）に興味のある高校生に「少しでもやりたい気持ちがあるなら、参加して損は絶対にありません！」と思いを語ってくれた。

＊＊＊＊＊＊＊

科学の分野は物理や生物だけでなく、地学や天文学など高校では専門的に学ばない分野にも広がっている。

文理選択がまだ決まっていない1年生や、将来の進路に悩んでいる2、3年生にとっても、科学館は視野が広がる場所だ。進路選択の一助としても、ぜひ一度科学館を訪れてみてほしい。

この度は取材させていただき本当にありがとうございました。（富・小・翠・桃）

「科学館は高校生の時期が一番楽しめます」

突撃！科学館を支えるインタープリター

今回の突撃インタビューコーナーは、多摩六都科学館インタープリターグループのリーダー、湯浅佳世子さんだ。

「インタープリター」とは展示とお客さんとをつなぐ架け橋になる人だ。展示の正しい体験のしかたを説明・解説する仕事で、他館ではサイエンスコミュニケーターとも言われている。

グループは10名ほどで、単なる遊びにとどまらない体験を通じた学びを重視しており、展示や説明に日々工夫をしているとのこと。各自で他の資料館に情報収集してアイデアを得ることもあるそうだ。科学館は扱う分野が広いため、知識が特定の分野に偏らないことも求められているのだという。



得意不得意関わらず
幅広い力を身につけて

インタープリターは「お客さんが『科学って面白い』と思えるきっかけを作る仕事です」と語る湯浅さん。科学館は子どもの遊び場だと思われがちだが、学校で知識をつけた高校生が訪れてみると面白い発見があるはずだという。教科書で学んだ知識が日常とつながる面白さを感じることができる高校生の時期こそ、科学館を最も深く楽しめるのではないかと話してくれた。

科学に興味がある高校生に対して「好き嫌いをせず何でもアウトプットしてほしいです」とアドバイスをくれた。

編集部のイチオシ！

ここでは、取材した博物館の中で編集部員がおすすめする展示をご紹介する。今回は２つピックアップ。興味のあるものがあったら、ぜひその目で確かめてみてほしい。

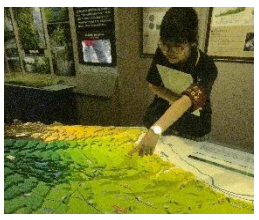
ムーンウォーカー



浮遊感を味わう編集部員

『チャレンジの部屋』屈指の体験型人気アトラクション「ムーンウォーカー」。月の重力を疑似体験することができ、地面を軽く蹴るだけで想像を超える高さまで飛び上がる。大人気のため長いときは30分以上待つこともあるそうだ。なお体重70kg以上の人は利用できない…

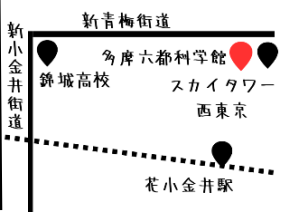
武蔵野台地の立体地形模型



錦城のある小平市の標
高が高いことに驚く

『地球の部屋』に入って右に進めば、緑の鮮やかなグラデーションが特徴的な展示に出会える。これは科学館のある西東京市をはじめ、多摩周辺の地形の標高差が確認できる立体模型。埼玉県南西部もカバーしており、錦城生の住む地域はほぼ確認できるのでぜひ探してみてほしい。

詳細情報



開館時間：9:30～17:00
休館日：（月）、年末年始ほか
入館料：有料（詳細はHP）
アクセス：
西武バス[武12]
「新青梅街道」下車
徒歩15分
花小金井駅北口
徒歩18分
スカイタワー西東京が目印！

ロマンチックな満天の星

「宇宙クルーズ2026〈追跡！ボイジャー1号〉」鑑賞

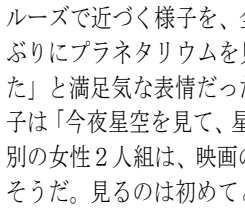
夏の大三角に大接近！

多摩六都科学館と言えばプラネタリウムドーム「サイエンスエッグ」。約１億４千万の星を映し出し、かつてギネス世界記録にも登録されていたプラネタリウム「CHIRONⅡ」が、観客を宇宙の世界へいざなう。

編集部は『宇宙クルーズ2026〈追跡！ボイジャー1号〉』を鑑賞。取材当日の夜空に浮かぶ星座の紹介や、夏の大三角を形作る星にクルーズで近づく様子を、全編生解説で楽しんだ。編集部員は「久しぶりにプラネタリウムを見ましたが、星がとても綺麗で見惚れました」と満足気な表情だった。また、今回で鑑賞が３回目だという親子は「今夜星空を見て、星座を探してみたいです」と話してくれた。別の女性２人組は、映画の聖地巡礼のためにはるばる神戸から来たそうだ。見るのは初めてという２人だが、見られてよかったと笑顔を見せた。



「CHIRONⅡ」の近くには
科学館の公式キャラクター・ペガロクが



解説に必要なのは資格
ではなく楽しむ心

生解説者「鑑賞後に夜空の星を探してもらえるように」

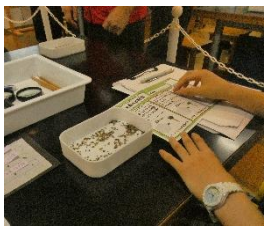
プラネタリウムを担当するのは多摩六都科学館の「天文グループ」。そのリーダーであり編集部が鑑賞した回の生解説を担当されていた齋藤正晴さんに話を伺った。齋藤さんが普段生解説で感じているやりがいは、一期一会の解説ができること。解説を始めたばかりのころは、暗く顔が見えない室内でお客さんの反応がうまくつかめなかったそうだが、今ではお客さんの反応をアドリブで拾いつつ解説しているのだという。また、各回で解説の担当が変わり、同じ番組であっても使用するＢＧＭや解説する星座のチョイスが変わるため、解説員の個性が出ていて面白いと教えてくれた。ちなみに齋藤さんが高校生におすすめのプラネタリウムは、中学生以上を対象に月一で専門的に星空について学べる『大人向けプラネタリウム』だそうだ。

以前は理科の教員を勤めていたという齋藤さん。解説員に特別な資格は必要ないが、勉強に偏りなく取り組むことが大切だと考えている。中でも英語を話す力の大切さを感じていると話してくれた。多摩六都科学館では、英語を母国語とする団体向けには、生解説ではなく自動音声を流すプログラムを用意している。齋藤さんは「自分が英語で生解説できたらもっと楽しいのに」と感じるのだとか。

錦城生に向けて「自分の好きなことを見つけて大切にしてほしいです。そしてそれを深める学びや体験をしてください」メッセージをくれた。

夢に向かう大学生たち

学芸員実習を見学



自分の手で触れて
種を観察できる

取材当日、２階の科学学習室にて、学芸員を志す大学生が実習を行っていた。そこには実習生が企画した体験プログラムが用意されていた。編集部が体験した野菜の種当てコーナーでは大学生が作ったプリントを使い、形も大きさもバラバラな種をヒントを頼りに見分けることができた。

このコーナーを作成し、解説を担当していたのは日本大学の菅文優香さん。菅さんが学芸員を志す理由は、展示を伝えることの魅力に惹かれたからだそう。伝え方次第でお客さんの展示に対する印象が変化するところが面白く、「私の解説を、興味を広げるきっかけにしてもらえたら嬉しいです」と語ってくれた。

プラネタリウム裏側ツアー！



デモ投影を行う
スクリーン

斎藤さんに、サイエンスエッグの下にある職員専用の部屋に特別に案内していただいた。ここにはミニドームが設置されており、サイエンスエッグでの星空の映り方を確認することができる。天文グループの方は天体の拡大や探査機の映写などの解説で使用する演出なども確認しながら、ここで番組を制作しているという。編集部員は「普段は見られない裏側に触れる機会はとても貴重でワクワクした」と笑顔を見せた。